

海を渡った又三郎 補遺

——1940 年代における児童映画『風の又三郎』の受容——

米村 みゆき

1、はじめに

1940 年公開の島耕二監督の児童映画『風の又三郎』は、日活系映画館で上映され、文部省推薦映画として「(本格的な) 児童映画の誕生」として評価も高く、主題歌のヒットとともに、多くの人に観覧された。米村は、1940 年前後の地元各紙における新聞広告の調査を行ったが¹、従来、東京などの日活系映画館での一斉公開と考えられてきた映画『風の又三郎』の上映地域が、北海道から九州ほか、京城、満州、樺太² まで及んでいたことが明らかとなった。また同映画を見た証言を集めたところ、大連の映画館で鑑賞し、主題歌を歌うことができる女性がいる。あるいは、学校巡回映画として小学校の講堂等で同映画の文部省版を鑑賞した男性がいた。

同映画の受容状況について、新聞に掲載された広告を手がかりにして調査したところ、典型的な宣伝文句は、たとえば、『満州日日新聞』1940 年 11 月 23 日付に掲載された「私達にもこんな時代がありました」という文言であった。他地域の地元紙の新聞広告についての調査によっても、同映画は〈童心〉というファクターによって、人気を獲得していたことが確認された。すなわち、映画『風の又三郎』においては、北海道から「外地」まで〈童心〉が普遍性をもった魅力として作用していた状況が見えてくる。そこでは、特定の場所を離脱し存在する「故郷」という風景＝地理が国民国家のアイデンティティと繋がっていた過程を見ることができる。

いわゆる「外地」での広告記事を辿るとき、東京における鑑賞と同様な日本映画の享受を示唆するものは少なくなく、上述の旧満州における日本人の映画『風の又三郎』の受容については、日本国内の状況と比較して遜色ないと言っても過言ではない。その一方、旧満州における日本文化全般の享受は“東京の転移”という側面のみでは括ることはできない。小泉京美が 1924 年に大連で創刊されたモダニズムの詩誌『亜』の調査から考察しているように³、国民国家形成の精神的支柱となった「故郷」という概念は、日本からの移民が推進された旧満洲において本人の領有意識を喚起するための文化的な装置として機能する。一方で「内地」の日本人と満洲在住の日本人の間の溝を顕在化させてもいる。すなわち、先行研究から確認されるのは東京文壇を基準とした日本文化の注入という側面のみでは括ることのできない「外地」在住日本人の文化享受であり、旧満洲においては理想郷のイメージと合いまった文化活動の特異な状況があると推測される。本稿では、このような目的意識のもと 1940 年代の『風の又三郎』受容につい

て東アジアを中心に再び研究を行った報告である。新資料や「外地」を中心とした受容状況の掘り下げについて調査の経過を述べるものである。

2、新資料の紹介と再調査への視角

まずは、いわゆる「外地」を中心に同映画の上映状況を映画広告や映画記事をもとに概観しておきたい。『樺太日日新聞』1941年6月13日付の映画広告では、樺太における映画『風の又三郎』の上映情報、および宣伝文句「大人の覗き得ない子供の世界を始めて描いた映畫」をみることができる。中国では『満州日日新聞』1940年11月20日付に「堂々封切迫る！」と記された広告をみることができる。また、翌日の同紙1940年11月23日付を確認するとより大きく広告が掲載されていることに気づく。上映劇場は「新富座」である。この劇場は瀋陽に存在していたが、その後、解放映画館と名称が変更になっている。住所は瀋陽市和平区太原南街41号。1932年に日本人によって設計された劇場で敷地面積は3530㎡、707席あったが2006年に取り壊された。跡地の近くは、デパートが群立する商業地で、近くに中山公園があり、家族連れで映画館を訪れたことを想像させる場所である。『満州日日新聞』の映画広告の宣伝文句について付言すれば、「私達にもこんな時代がありました」「童心と夢とあこがれの世界」とある。やはり〈童心〉がキーワードとなっている。また同紙11月26日付の記事からは、上映期間が1940年11月23日～29日とわかる。同じく中国の『大陸新報』1940年10月18日付では「映畫物語 風の又三郎（一）」という記事が確認できる。『大陸新報』は上海で発行された日本人向けの新聞である。同紙では、1940年10月18日から同26日まで「映畫物語風の又三郎」という連載記事（全八回）の掲載が確認されたが、上海における映画『風の又三郎』の上映はまだ確認できず、更なる調査で検証してゆきたい。

「外地」ではないが1886年から1945年にかけて発行された『やまと新聞』1940年10月12日付には、映画『風の又三郎』についての紹介記事が確認される。この記事は、当時同映画をみた人の証言であるため、映画『風の又三郎』がどのような点がどのような魅力として受け止められていたのかを知る具体的な言説として読むことができるだろう。同紙は日刊新聞で、庶民向けの娯楽や趣味の宣伝に力を入れた小新聞であった。同紙の中心をなす記事は、花柳界や芸能界の記事、続き読み物、ゴシップ記事である。したがって同記事も「新映畫印象」として『風の又三郎』を鑑賞した記者の印象の記となっている。「児童映畫だが大人でも興味を與へる一風変わった味がある」ものとし、片山明彦の三郎役ほか子役たちの演技をほめている。添えられた写真は「河原の少年達」のキャプションであり、洋服姿の高田三郎と村の子供達の楽しそうな表情がみえる。また、記事中では中田弘二の先生役や風見章子の嘉助の姉役も「色どり

としてよい」と述べている。同映画がいわゆる子供向けの映画という趣だけではなく、子役の演技力の高さや有名俳優の起用で目をひいたことがわかる。

次には、韓国における受容に関連する新資料について検討をすすめたい。まずは『京城日報』1940年10月30日付の広告を確認する。『京城新聞』は韓国在住の日本人向けの新聞であるため、広告も日本人向けのものとなっていると考えられる。宣伝文句は、「汚れなき童心の世界、泉の如き清純な詩情、そして美しき自然の風物・・・」であり、上述の『満州日日新聞』の広告と同じく、同映画中における〈童心〉を魅力として宣伝していることがわかる。〈童心〉が謳い文句となっている状況は、同日の「学芸」欄に「新映畫評 風の又三郎 童心を描く問題作」として紹介されている事実からもみて取れる。上映劇場は、京城宝塚劇場と記されている。

『毎日新報』の「中東毎新」欄 1940年10月27日付の広告は、上映劇場が京城宝塚劇場と記されているため、上記『京城新聞』の上映情報と同一であろう。「中東毎新」欄は、朝鮮半島中

The image is a collage of various advertisements from the 'Chungdong Shinbo' (中東毎新) newspaper, dated October 27, 1940. The ads are in Japanese and Korean. Notable ads include:

- 全鮮外言決勝大會** (All-Korea Foreign Language Victory Competition): A large advertisement at the top right.
- 京城電話掛號** (Seoul Telephone Directory): A list of telephone numbers and names.
- 松花江** (Songhua River): A movie advertisement with a large title and a small image of a person.
- 風之又三郎** (The Wind and the Third Young Man): A movie advertisement featuring a portrait of a man and the text '美しい夢と空想の清純な詩情' (Beautiful dream and pure poetry of imagination).
- 肺病療養** (Pulmonary Disease Treatment): An advertisement for a hospital or clinic.
- おひやう** (Hello): An advertisement for a product or service.
- 治淋界の新紀元** (New Era of Gonorrhea Treatment): An advertisement featuring a large illustration of a hand and the text '急慢性淋病を完全治癒' (Complete cure for acute and chronic gonorrhea).
- 水酒に注意** (Attention to Water and Wine): A small advertisement.
- 野柔生鮮、實果の公定價格制** (Wild and Fresh, Real Fruit's Publicly Fixed Price System): An advertisement about fruit prices.
- 新新學校舍落成** (Shinshin School Building Completed): An advertisement about a school building.
- 歡樂街自願強化** (Happy Street Voluntary Reinforcement): An advertisement about street improvement.
- 後厨房に安全燈** (Safety Light in the Back Kitchen): An advertisement about kitchen safety.
- 來月十日全鮮外言實施** (Implementation of All-Korea Foreign Language on the 10th of Next Month): An advertisement about a language competition.
- 學藝廣告** (Arts and Crafts Advertisement): A small advertisement.
- 日本編** (Japan Edition): A small advertisement.
- 伊藤光助先生著 國語資料ニヒ見** (Written by Mr. Ito Mitsuo, National Language Materials in History): An advertisement for a book.
- 海神丸** (Kamikaze Maru): An advertisement for a ship.
- 片山明彦主演 京城寶塚劇場** (Starring Katsuyuki Katayama, Seiyuza Theatre): An advertisement for a play.

図1 「中東毎新」1940年10月27日2面

部および東部地域（京畿道、江原道等）に関する記事を掲載する欄であったと見受けられる。

しかし、同紙は広告等以外の記事は、ハングル表記で記されている。（図1）すなわち、この新聞紙面における広告の存在は、朝鮮人⁴に映画『風の又三郎』を見せようとした可能性を示しているのである。

映画『風の又三郎』以外の映画広告はどうであったのだろうか。「中東毎新」の同年11月3日付を確認すると、やはり映画広告以外は、ハングル表記であるが、アメリカの西部劇映画『大平原』（1939）の映画広告にはハングル表記の文字が含まれている。사랑（愛）等は、ハングル表記、ロマンスはカタカナ表記であり、二つの文字が混在している。しかし、同日の『風の又三郎』の広告は日本語のみである。（図2）『毎日新報』（매일신보）同年11月5日付では、や



図2 「中東毎新」1940年11月3日2面

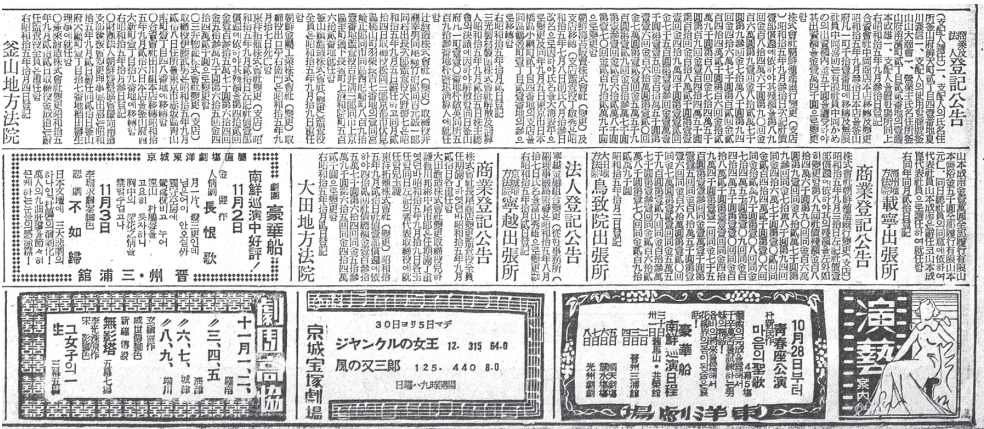


図3 『毎日新報』1940年11月3日6面

はり新聞記事はハングル表記であるが、映画広告についてはハングル表記と日本語表記が混在している状況がみえる。さらに同広告では、映画『風の又三郎』は、同年 10 月 30 日より 11 月 5 日まで 1 日 3 回上映されていたことがわかる。(図 3)

現地の、他の新聞ではなく『毎日新報』に『風の又三郎』の映画広告が掲載されていたのは、どのような理由に拠るのだろうか。『毎日新報』について考えられるのは、朝鮮総督府の機関紙であるという事実だろう。日本統治時代における統治に協調的な指向を持つ新聞であったこと——現地の新聞における映画『風の又三郎』の広告の有無は、当時の各々の新聞が抱えていた性格と深く関連するものと考えられる。

ここでは今後の調査課題として、次のような問いをもたらしめているだろう。なぜ、『風の又三郎』の映画広告は、日本語表記だったのか、また日本語で書かれた広告は、韓国人の観客を誘致していたのかどうか、という点である。さらに、これまでは映画『風の又三郎』の「外地」での受容者として、「外地」に住んでいた日本人の観覧のみが確認されてきたが、ハングル表記の新聞に映画広告が掲載されていた事実は、日本統治時代に、日本語教育を受けた「外地」の子供たちに同映画をみせようとした可能性についての再考を促している。この点はさらに資料を渉猟して考察を深めてゆきたい。

3、『臺灣日日新報』から見る映画『風の又三郎』の受容

次に、台湾における宮沢賢治の受容、および映画の上映状況について、明らかになった点を述べてゆきたい。

まず、台湾で映画『風の又三郎』が上映された劇場について述べる。

『臺灣日日新報』1935 年 7 月 7 日付の記事には映画『風の又三郎』が上映された劇場の着工記事が掲載されている。「新様式の設計で大世界館が著工」という見出しで、「一千七百名の観衆を容れる」「堂々たる白亜の建築」と続く。同記事によると、当局に建設申請中であった大世界館は、この程許可が下り、「西門町二丁目二十一番地」に台湾土地建物会社の設計工事で建設に着手した。外観は日比谷両議場の特質を折衷し、内部は日本劇場を範にとって美化したという。

敷地六〇〇坪（約 43 m²）、地下一階、地上三階、収容人員地階千四名、二階四百四十九名、中二階二百五十名の鉄筋コンクリートの「堂々たる白亜館」。「發聲映寫機やステージの設備等にも遺憾なきを期し」、「新機軸として、優雅なボックスの設備をなす筈」、上映映画はメトロ、パラマウント、ワーナー、ユナイテ、東和商事、三映社、POL、松竹各社の巨作のみをピックアップすると伝え、この新映画館の出現によって台北の興行界も活気を呈するに至るだろうという。

開館は明春元旦とあるため、1936年1月に開館したことになる。記事には「本年初頭完成の大世界館」というキャプションの写真が付されている（図4）。同映画館については翌年の1936年4月11日付の記事でさらに詳しい情報が得られる。見出しは「“銀幕界の覇者” 六つの世界館」であり、「映畫は安心して観れる/サービスは大衆本位」と小見出しが続く。記事が伝えるのは、以下の内容である。台湾に活動写真の常設館の経営者は多いが、個人資本によって経営されているものは、台湾全島に世界館あるのみ。しかも、今やこの世界館は、西門町の市場の公園横に屹立せる新世界館を筆頭に第二世界館、太平町の第三世界、ほか全島に六館となり、名実ともに銀幕界の覇者となっている。経営主が世間周知の「古矢せん」であることは、殊に今更付言する必要もない、日本物としては日活、大都、PCL、洋物にはメトロ、パラマウント、ユナイテッドコロネビア、三映社。世界館の観客に対するサービスも十二分の満足を与えるように苦心を払っている。また新世界館の発声機は八千円の独逸製、大世界館には価格一万円のウエスタン発声機を取り付けている。想定する観客は、上流層ではなく、最も多数を占めている大衆がターゲットであり、大衆席を一番良い位置に選ぶなど設計にも凝らしている。映画は一般父兄としても子女に見せないことは不可能な状況である。以前は悪思想の製造元みたいに言われていたが、世情の緊張化により、時折、時事物や思想物なども制作され、思想を先導する一助に利用されている。父兄同伴で映画を見物し、その後で子どもの感想を聞き、もし子どもが間違った見方をしていれば、是正するようにと述べている。

大世界館のある西門町は、日本統治時代に開発された地域で、当時の町名である。現在は、MRT 板南線「西門町」という駅名は残るが、地域名は成都路、西寧南路と中国南東部の地名となっている。駅の西側は、日本人の娯楽地域として発展してきた。当時、数々の映画館がオープンし、映画街が形成され、多くの映画館が開館した。現在の西門町は、若者の集まる繁華街であり、流行文化の発信地の趣を持つ。映画館や商業ビルが集まり、日本のアニメや雑貨などの文化が集まったエリアである。映画の町としての面影も残しており、大世界の名を残す商業



図4 『臺灣日日新報』1935年7月7日9面掲載の大世界館

ビルも存在する（図5）。日本統治時代には、台北にある劇場は十以上あり、記事中の古矢せんが経営するものについては、大世界館（台北市西門町2丁目21番地）、新世界館（台北市西門町1丁目3番地）、第三世界館（台北市太平町3丁目74番地）が確認される。



図5 「大世界」の名を残す商業ビル（西門町駅付近：米村撮影）

それでは、大世界館での映画の上映はどのようなものであったのだろうか。また映画広告記事からどのような状況が読み取れるのだろうか。

1941年4月18日付『臺灣日日新報』4面には、ほぼ紙面幅の『風の又三郎』の映画広告と記事が掲載されている。映画広告は、映画代金について確認できる。地下席は七〇セン、階上席、ボックス席1圓の記載がみえる。この広告で目をひくのは、高田三郎役の子役・片山明彦の似顔絵が前面、その後方に奥に登場回数が少ない嘉助の姉役の風見章子の似顔絵が描かれていることである。片山明彦は、1938年公開の山本有三原作、田坂具隆監督の映画『路傍の石』で主人公の吾一少年を演じ、名子役の評判を得ていた。同映画は文部省推薦映画の第一作でもあった。同じく風見章子も、1939年公開の長塚節原作、内田吐夢監督の日活映画『土』で主要な役を演じていた。『風の又三郎』の映画広告には、端役の風見章子を使っていることから、数年内に話題になった主役級の俳優を宣伝に使っていることがわかる。仙台日活館で上映された際の映画広告も片山明彦と風見章子の画像が使われているため、似顔絵はその写真による当該広告の応用といえるだろう。広告に使われた宣伝文句は「児童映畫の持つ最高の藝術境を描破した期待篇」「私達にもこんな時代がありました！」「私達を懐しい心の故郷へ呼び戻す初夏に（一字不明）れた名作の歓び！」となっている。台湾でも郷愁、故郷が視聴者の“想像の共同体”となっている様子が確認される。

また、同面の映画記事は、「風の又三郎 十八日から大世界」という見出しで、映画内容の紹介と映画の一場面の画像が掲載されている（図6）。



図6 『臺灣日日新報』1941年4月18日4面

1941年4月19日付には「今晚の映画」として、大世界館で『風の又三郎』が七時三分より上映されていることが記載されている。プログラムを確認すると上映前に3分間の「日本ニュース」があり、上映後には、「故郷」の予告編が10分間、その後9時から10分間の「海外ニュース」そして、吉川英治原作の時代活劇『神変麿香猫』の上映と続く。翌4月20日号の「今晚の映画」欄にも同じ記載が確認される。両日はそれぞれ土曜日、日曜日に相当するため、週末の夜に映画鑑賞に出かけるようにプログラムされていたことが想像される。

日本における日活系映画館での『風の又三郎』の上映は、1940年10月10日の東京、神奈川、名古屋、京都、大阪、神戸を始めとして各地で順次封切された。日本での封切り時期における『臺灣日日新報』の記事を参照すると、二回にわたって、『風の又三郎』の紹介記事が掲載されている。1940年9月19日付と、10月23日付である。9月19日付の記事には、高田三郎と村の子どもが手を繋ぐ映画のワンシーンが掲載されている。「映畫——風の又三郎」という見出しで、日活玉川と劇団東童の提携第一作作品であること、東童が劇場で上演し最も好評を博したものを映画化した経緯や原作は宮沢賢治、演出は島耕二、島の愛児片山明子や大泉滉、星野和正、中田弘二、風見章子などの出演について記される。「都會のわづらはしさに影響されない山間の学校を背景に素朴な子供達の童心と美しい自然との交流を子供達の主観を通して描いたもの」と紹介される。10月23日付の記事についても、紙面の中央に、「文部省推薦映畫『風の又三郎』」として村の子供と高田三郎が話をしている映画のワンシーンが掲載され、映画内容の紹介がみえる。『臺灣日日新聞』の読者にとっては、日本での封切当時は映画『風の又三郎』の紹介記事を読み、その半年後に満を持して同映画を台湾で観覧することができたことになる。

4、国立台湾図書館の所蔵本

国立台湾図書館において1940年代の宮沢賢治の書籍（童話本）の蔵書が確認された。その調査結果について次に述べる。同館には、羽田書店版の児童書『風の又三郎』が所蔵されている。六刷で「昭和十五年十一月一日発行」のものである。登録印をみると、「44年11月28日」、（価格は200）。また『宮沢賢治全集 第一巻』（十字屋書店、1940年）は「中研院合史総督府圖書」の記載があり、図書館登録印は、「35年9月18日」価格は「3.20」となっている。『宮沢賢治全集 第三巻』の図書館登録印も同様の日付、価格も一巻と同じである。登録印の年号については、移管など様々な状況が考えられ、誤記の可能性は否定できないが、現在のところ不明である。また十字屋書店発行の草野心平編『宮沢賢治研究』は「昭和十四年九月六日」発行のものであった。

¹ 米村みゆき「Making of 風の又三郎——文部省の戦略と映画教育」『宮沢賢治を創った男たち』（東京：青弓社、2003年）

² 地名については、原則、当時の名称を用いた。

³ 小泉京美「滝口武士『亜』から『蝸牛』への行程——変容する「外地」の風景——」『日本近代文学』82集、2010年5月

⁴ 朝鮮人については当時の呼称を用いた。

謝辞：本稿は、JSPS 科研費 JP16K02419（研究(C)「1940年代の東アジアにおける日本児童文化受容とナショナリズムに関する調査研究」）の研究成果の一部である。